

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20592603

研究課題名（和文） 双生児と母親との母子関係形成プロセスに関する研究

研究課題名（英文） The construction process of the mother-and-infant relation to twins and a mother

研究代表者

布施 晴美（FUSE HARUMI）

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：00227505

研究成果の概要（和文）：

本研究は、双生児と母親との母子関係形成プロセスの特徴を明らかにすることを目的に、双生児育児中の母親を対象に双生児が生後 1 か月から 18 か月になるまでの期間に縦断的調査を実施した。双生児育児を始めた最初の 1 か月というのは母親にとって重要な時期であるが、母子の関係性を見る上で、3 か月も注目すべき時期であることがわかった。双生児が 3 か月になる頃は育児に慣れる時期と考えられるが、この時期にうまく育児に取り組んでいるのか、母親が自信を喪失していないか、双生児をどのようにとらえているのかを確認する大切な時期であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify the feature of a mother-and-children relation process of twins and a mother. In the period that twin babies are from 1 month until 18 month, I conducted this investigation to the mother who is doing twins child-care.

I considered that it was the important time to get used to twins' child-care for three months after the birth for twins' mother. On the other hand, when calling it three months after the birth, I suggested that it was the important time to check whether twins' mother can be tackling twins' child-care well, whether the mother has lost confidence, and how the mother has caught twins' individuality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：双子 双生児 母子関係 育児ストレス 育児支援

1. 研究開始当初の背景

近年少子化が進行する一方で、不妊治療の進歩に伴って、多胎児の出生率は増加してきている。多胎妊娠中の妊婦の不安は大きく、

また、多胎児出産後の育児については、母親の疲労やストレスなどが問題として多く取り上げられている。さらに多胎児は虐待のハイリスクの要因の一つに挙げられ、早い時期

から効果的な育児支援が求められている。こうした中で、多胎児と母親との関係性を支援することは重要な視点であるが、多胎児と母親との母子相互作用についての実証的な研究は海外の文献で少数みられるのみである。

単胎児とちがって双生児など多胎児の場合、母親は一度に二人以上の子どもと愛着関係を形成していかなければならず、このことは、母親と乳児の1対1の応答的なやり取りの重要性を述べている Klausら(1982)の単向性の理論からみて、大変困難な課題である(服部ら, 2002)。

加えて、双生児の母親は育児の負担が多く、それぞれの児と愛着関係を発展させていく余裕がなく(Holditch-Davis,1999)、また、母親自身は双生児との三者関係の形成にストレスを感じている(Thomas,1996)という報告もある。また、双生児に対する異なる信頼感(片方は高く、もう片方は低い信頼感)を抱く母親の出現率について、乳児期において19.8%であった(酒井, 2003)という報告がある。双生児育児においては、母親は子どもの反応のよさ、扱いやすさなど無意識に比較することによる偏愛(一方の子どもを特に可愛く親しむを感じる状況)が生じる可能性も大きい(吉田他, 2007)。

一方で、そのような状況にもかかわらず、多くの双生児の母親は、子どもたちと比較的早期から良好な関係を保つことができている。そこには双生児特有の母親と子どもたちとの愛着関係形成プロセスがあると考えられる(服部ら, 2002)。その鍵となるものは何であるのか。子どもの発達や反応などから生じる子どもに対するアンビバレントな感情、母親自身の心身の疲労感等から生じるアンビバレントな感情などが発生しても、母親自身が内的操作をすることによって、二人の子どもと良好な母子関係を築き、良好な母子相互作用を促進していると考えられる。

本研究では、双生児と母親との母子関係の形成過程を縦断的に調査することによって、母子関係形成プロセスの特徴と構造を明らかにし、また、その関係性を促進する因子及び阻害する因子を探索することをねらいとした。そして、双生児と母親との健全な母子関係を促進するための介入の示唆を得たいと考えた。

2. 研究の目的

双生児と母親との母子関係形成プロセスの特徴と構造、および、母子関係形成に影響を及ぼす因子を明らかにする。

- (1) 母親が双生児各々の個性をどのようにとらえて、関わりをもつのかを知る。
- (2) 母親の双生児それぞれに対して、かわり方や気持ちの偏りの発生状況について知

る。

- (3) 母親の双生児間の気持ちの違い(偏り)や平等に対する認識と母親自身の内的処理について知る。

- (4) 双生児と母親との母子関係形成プロセスに対して、影響を及ぼす因子(関係性を促進する因子と阻害する因子)を探索する。

本研究は上記を明らかにすることにより、乳児期の双生児育児支援について検討するための基礎資料となると考える。

3. 研究の方法

本研究では、仮説として双生児と母親との母子関係形成プロセスを3期に分け、I期は母親が双生児二人を一組として扱い、平等性と双生児の特徴を探索する時期、II期は双生児それぞれの特徴を見出し、個別の介入に違いが生じてくる時期、III期は双生児の違いを認め、それぞれの特徴をいとおしく思う時期とした。このプロセスをたどる中での影響因子を明らかにすることと、良好な関係であるII期からIII期に進む中での母親の内的処理を明らかにすることをねらいとして、調査を組み立てた。

(1) 母乳育児と母子関係について

母子関係形成の関連要因の一つと考えられる双生児の母乳育児について、主研究の対象とは別の双生児の母親を対象に、母乳育児に対する認識を質問紙により調査し、単胎児の母親と比較した。

(2) 双生児と母親との母子関係形成プロセスの探索と影響因子について

初産の双生児家庭(健康な同性の双子、核家族)の母親に対して、双生児が生後1か月から18か月になるまでの期間に、3か月ごとに縦断的調査を実施した。縦断的調査では、質問紙調査を6回および家庭訪問(ビデオ撮影)を1~3回実施し、データを収集した。調査項目は、母親の対児感情、子どもとの信頼感、子どもの気質、子どもへの関わり合いの違いの認識、母親の精神健康(GHQ30)、母性意識、育児困難感、母親の自尊感情、夫との関係性、母子相互作用とした。家庭訪問では、母子相互が関わっている授乳場面、あるいは遊び場面について、ビデオ撮影を実施した。

4. 研究成果

(1) 母乳育児と母子関係について

双生児の母親の母乳イメージは「苦痛・負担因子(大変、しんどい、眠い、痛い、張る、ストレス、面倒、努力、乳腺炎の9項目)」が単胎児の母親よりすべての項目が顕著に高いことが示された。「親子の情愛因子(親

子、優しさ、愛情、笑顔、信頼、絆、喜び、幸せ、スキンシップ、安らぎ、他など 19 項目)、「母乳栄養肯定因子 (新鮮、経済的、簡単、健康、安心、栄養、安全の 7 項目)」については、単胎児の母親との比較では顕著な差は見られなかった。

双生児の母親の母乳を飲ませていた時の気持ちについて自由記述では、<母乳を吸っている子どもの姿に感動した>、<母親としての役割を果たしていると感じた>などポジティブな記述がある一方で、<子どもたちがうまく母乳を吸えない>、<他人に代わってもらえない>、<母乳量が不足している>、<母乳が足りているか不安>、<二人に平等に授乳できているのか心配>など、苦労したことや心配や不安だったことの記述が多く見られた。

双生児の母親の母乳育児の考え方については、<母乳をあげることが母親にしかできないこと>、<愛情表現>、<達成感がある>、<母子のスキンシップ>など母親の役割や母乳の利点について述べられていた。一方で、<母乳育児がすべてではない>、<母乳が出ないことでプレッシャーを感じることはない>、<過度な母乳信仰は母親にストレスを与える>、<大事なものは子どもたちへの愛情>、<母乳にこだわり、ストレスをためたが、育児そのものをもっと楽しめばよかった>など、母乳育児へのこだわりに対する否定の意見も同時にみられた。

双生児の母親は、母乳の利点は理解し認識しているが、母乳信仰にとらわれないことで、母親のストレスを軽減していた。母乳育児のみが「愛情」や「絆」をつくるものではなく、それにとらわれず育児を楽しむことが、「愛情」や「絆」を深めていくために大切なことと感じていることが示された。これは母親の内的処理にあたりと考えられる。母乳育児は母子の関係性に重要な役割を果たすものであることは、多くの先行研究で示唆されているが、本研究では母乳育児が行えないことにより、双生児との関係性の発達に阻害されるものではないと母親が意識していることが示された。母乳育児に対してストレスがある場合にはむしろ、二人分の母乳栄養育児の呪縛から解放されることで、母親の精神面に余裕ができ母子の関係性が良好に作用することが見出された。

最後に、母乳育児は母親にとっては、母親役割の一つを果たしたことを示し、有能感や達成感を強化するものでもあるため、安易に中断を求めるものではないことも付け加えておく。

(2) 双生児と母親との母子関係形成プロセスの探索と影響因子について

現在も調査が継続されておりデータの分

析が完了しておらず、また、現在収集できたデータは少なく一般化することはできないが、得られたデータから見出したことを報告する。

母親の双生児に対する認識として、生後間もなくからそれぞれの特徴をとらえていることが示されたが、実際の関わり方に対する違いはほとんどなく、双生児の二人を同じに扱い育児をしていた。抱く頻度なども同じになるよう配慮が見られた。新生児期は仮説のⅠ期に相当し、双生児の特徴を探索し、特徴を見出し始めていた。

双生児が生後 3 か月以降になると、母親は双生児の個性を見極め、育児の介入方法にも子どもそれぞれにあった対応をするようになっていた。しかし、12 か月になる頃には育児介入の違いはむしろ少なくなってきた。子どもとの信頼感などの関係性は双生児間での偏りが生後 3 か月頃から見られ始めるが、この経過と変化については、事例においてそれぞれであり、仮説のⅡ期Ⅲ期に相当する時期でもあり、さらに慎重に検討していく必要がある。信頼感の差については、母親は子どもの反応から感じとり、二人の反応の違いが信頼感に影響しているようであったが、この反応の表れ方の違いは個性ととらえ、愛情の差となることはなかった。

母性意識は、双生児の月齢が大きくなると共に肯定的な得点は高くなり、否定的な得点は低下してきていた。双生児の成長と共に育児に慣れ、育児を楽しむようになっていくことが示された。一方で、育児困難感の月齢によりばらつきが見られ、双生児が生後 3 か月の時は低値となったが、12 か月の時には上昇がみられていた。GHQ30 については、生後 1 か月の時点で、身体的症状、不安・気分変調、睡眠障害がみられ、3 か月の時点では身体的症状のみと改善したが、12 か月の時点では一般的疾患傾向が顕著に現れ、身体症状も変わらず見られていた。

どの事例も夫の協力は得られ、母親の精神的な支えとなっていることが示されたが、身近に理解者協力者がいても、双生児育児は母親の心身に負担があることは示された。見方を変えると、心身に負担が生じても双生児と良好な関係性が保たれているのは、やはり夫などの協力者の存在が大きいといえる。

双生児育児を始めた最初の 1 か月というのは母親にとって重要な時期であるが、3 か月も注目すべき時期であることがわかった。双生児が 3 か月になる頃は育児に慣れる時期と考えられるが、まずは、この時期にうまく育児に取り組んでいるのか、母親が自信を喪失していないか、双生児をどのようにとらえているのか確認する大切な時期であると考えられた。

今後も調査を継続し、双生児と母親との関

係性構築の特徴と影響要因を明らかにしていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

布施晴美：双生児の母親の母乳育児に対する認識、十文字学園女子大学人間生活学部紀要、査読有、7巻、189-199、2009年。

〔学会発表〕(計1件)

布施晴美：双生児の母親の母乳育児に対する認識、第3回乳幼児保健学会(広島)、2009年10月24日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

布施 晴美 (FUSE HARUMI)
十文字学園女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号：00227505

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)